



文化庁海外メディア芸術祭等参加事業

ドイツ・ベルリンのメディアアートの祭典「トランスメディアール 2014」の 出展作品について。

「文化庁海外メディア芸術祭等参加事業」（主催：文化庁／企画・運営：一般財団法人NHKインターナショナル）では、メディアアート、映像、ウェブ、ゲーム、アニメーション、マンガ等の優れたメディア芸術作品を紹介するため、海外のフェスティバルや施設において、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に展示・上映・プレゼンテーション等を実施しています。

このたび、ドイツ・ベルリンで1月29日（水）から2月2日（日）まで開催されるメディアアートの祭典「トランスメディアール 2014」に参加し、作品展示・関連イベントの実施を通じて、優れたメディア芸術作品を紹介します。企画ディレクターは、昨年度までの3年間、第14回～16回文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門の審査委員を務め、様々なメディアでプロデュースやコンテンツ開発を手掛ける伊藤ガビン氏です。

今回の「トランスメディアール 2014」のテーマは「afterglow（アフターグロー＝デジタルの余韻）」。

本フェスティバルでは、デジタル時代以降の表現の在り方を問う作品が紹介され、プレイベントとして世界中から70名以上のアーティストやプログラマーが集うイベント「Art Hack Day Berlin（アート・ハック・デイ・ベルリン）」が開催されます。ここで制作された作品は、「トランスメディアール」会期中に発表される予定で、文化庁メディア芸術祭からも複数の作家が参加します。

■ 参加フェスティバル概要

参加先：「トランスメディアール 2014」

開催地：ドイツ、ベルリン市

会 期：「トランスメディアール 2014」 2014年1月29日（水）～2月2日（日）
プレイベント「アートハックデイ」 1月27日（月）～1月29日（水）

会 場：世界文化の家（Haus der Kulturen der Welt）

主催者：transmediale - festival for art and digital culture berlin

入場料：8euro～（チケット種類・日時によって異なる）

来場者数：約 20,000 人（2012年実績）

■ 実施概要

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業

「exodus from the formal internet」（作品展示・関連イベント）

会場：世界文化の家（HKW）展示ホール、ホワイエステージ、カフェグローバルステージ

入場料：無料

主催：文化庁

共催：トランスメディアール 2014

企画ディレクター：伊藤 ガビン（ポストーク株式会社代表）

事業アドバイザー：ディビッド・ディヒーリ（2dk., Ltd 代表）

公式ウェブサイト：<http://jmaf-promote.jp/global/>



1. 文化庁メディア芸術祭とは

文化庁メディア芸術祭はアート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。平成9年度(1997年)の開催以来、高い芸術性と創造性をもつ優れたメディア芸術作品を顕彰し、受賞作品の展示・上映や、シンポジウム等の関連イベントを実施する受賞作品展を開催しています。今年度〔第17回〕は、過去最多となる世界84の国と地域から4,347点に及ぶ作品の応募があり、文化庁メディア芸術祭は国際的なフェスティバルへと成長を続けています。

また、文化庁では、メディア芸術の創造とその発展を図ることを目的に、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を国内外で広く紹介する多彩な事業を実施しています。海外・国内展開をはじめ、創作活動支援や連携推進までを含む関連事業を通し、次代を見据えたフェスティバルを目指しています。

2. 参加フェスティバル「トランスメディアール 2014」について

「transmediale (トランスメディアール)」は1988年から始まった「ビデオフィルム・フェスト」を前身とし、展覧会、シンポジウム、映像作品の上映、ワークショップなどで構成されたメディアアート・フェスティバルで、毎年ドイツ・ベルリンで開催されています。フェスティバルの名の通り、分野を超えた表現が集う場を目指し、毎回異なるテーマを設定した上で、様々な視点から現代文化を再考し続けています。25周年を迎えた2012年からは、アーティストック・ディレクターとしてKristoffer Gansing (クリストファー・ガンシング)氏が就任しています。

2014年のテーマは「afterglow (=デジタルの余韻)」。“デジタル時代におけるデジタル以前の時代の名残”あるいは“ポスト・デジタル時代におけるデジタル時代の名残”を意味しています。

メディアアートの黎明期にインターネットはメインテーマの一つでしたが、現在私たちの生活は、スマートフォン等でネットに常時接続された状態で、インターネットは不可視(あってあたりまえの存在・十分に行き渡り・透明化した存在)なものになっています。この変化を検証するような、かつて描かれた未来像を取り入れた作品や、高度な技術が浸透した時代のDIYを感じさせる作品が集まります。



Photo: Sabine Wenzel

transmediale/
art &
digitalculture



ART_
HACK
_DAY



■ プレイベント「Art Hack Day Berlin」

「Art Hack Day (アートハックデイ)」は、アートを試みる技術者と、テクノロジーを試行するアーティストのためのインターネットをベースにした活動です。アートとテクノロジー、そして新たな事業の創造をつなぎ合わせることで、先駆的な技術やアートを通じたコラボレーションの可能性を探求しています。2012年には米国・ニューヨークにてアート作品やライブパフォーマンスを実施し、以来、ボストン、サンフランシスコ、ストックホルム、ベルリンでも様々なアーティストや技術者が集うイベントを開催しています。

今回は「トランスメディアール 2014」のプレイベントとして開催され、ここでの創作活動や制作作品がフェスティバル会期中に紹介される予定です。創作の熱気やクリエイティビティが各々のアーティストに共有され、それらが作品制作に反映されることで、アーティスト自身の思いもよらない展開、新しい表現が生まれることが期待できます。<http://arthackday.net>

■ 文化庁海外メディア芸術祭等参加事業「トランスメディアール 2014」参加について

文化庁メディア芸術祭海外参加事業では、「トランスメディアール 2014」の参加として、複数の作家による作品展示・上映・関連イベントを実施します。フェスティバルテーマ「afterglow」から、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に、日本のメディア芸術作品にある表現や創作の特徴に着目し、企画ディレクターの伊藤ガビン氏が「exodus from the formal internet (エグソダス・フロム・ザ・フォーマル・インターネット=正しいインターネットからの脱出)」として企画を構成しました。作家による既存の作品のみならず、作家の活動・作品の手法、そして私たちを取り巻くインターネット環境を見据えた企画テーマ「exodus from the formal internet」により、同時代の優れたメディア芸術作品を紹介します。

■企画テーマ：

エグソダス・フロム・ザ・フォーマル・インターネット

「**exodus from the formal internet**」(正しいインターネットからの脱出)

企画ディレクター 伊藤 ガビン

かつてインターネットは様々な意味で自由な空間だった。あるいは自由を求める人々が集うフロンティアだった。その未来にユートピアを見ていた。実際僕たちは数十年自由を謳歌したし、テクノロジーはそうした未来を後押ししているかのように感じていた。

しかしインターネットの普及が進み、スマートフォンやスマート家電などが生活に染み渡る中でその存在が不可視となった結果(そしてそれは僕らが望んだことだったにもかかわらず)、そこはなんだかずいぶん窮屈な空間になってきた。

発言のすべてが言質のように扱われ、ちょっとでも間違っただけを言えば嘲笑され、違法なことをしたものに優しく接するだけで犯罪者のように扱われる。思いつきでキーボードを叩く前に、誰からも非難されないかを検証するようになり、クリーンな情報だけを発するようになり癖がついてきた。いまポスト・デジタルを思う時に、このネットに蔓延する窮屈さとうまく向き合うかということが大きなテーマとなる。

文化庁メディア芸術祭の過去の作品の中、あるいはそれを作った作家の中には、こうした窮屈さを炙り出している者、あるいはこの窮屈さから脱出する方法を模索している者達がいる。

本企画では、そうした作家・作品を紹介したい。

またデジタル表現から、その体験を血肉にしつつ、アナログ表現をし始めたものたちにも注目したい。彼らもやはり旧来のメディアアートという領域の閉塞感から逃れるために、アナログ的な手法に行きついたら違いないからだ。

伊藤ガビン：
編集者/クリエイティブディレクター
1963年、神奈川県生まれ。学生時代よりコンピュータホビー誌の編集者として活動。(株)アスキーのパソコンホビー誌『ログイン』の編集を経て、93年、ポストーク(株)設立。編集、執筆、CG制作、映像制作、テレビ番組企画、ゲームソフト開発などを中心に活動中。女子美術大学短期大学造形学科デザインコース教授。



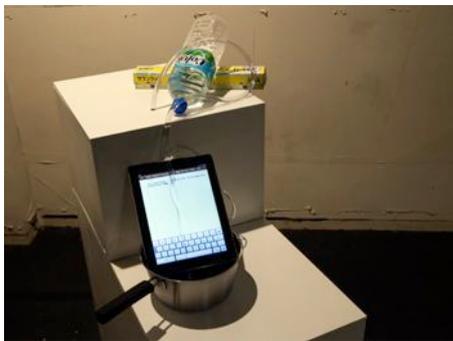
3. 参加作品 (1/15 発表)

『思い過ごすものたち』 谷口暁彦

メディアインスタレーション (2013)

iPad や iPhone を日用品のひとつと捉え、画面の中と外を様々な方法で関係させる彫刻作品。特別なソフトウェアをインストールせず、タッチパネルの入力や、内蔵された GPS、方位情報などを通常の使用方法から解放し、最小限の手数によって新たな文脈で提示する。それは種も仕掛けもないあからさまな誤認識の装置とも言えるが、そこで誤認識をしているのは iPad や iPhone であり、鑑賞者自身でもある。そんな曖昧さの中に「思い過ごすもの/物/者」たちの存在を感じることができる。

<http://okikata.org/exhibition/001/>



©谷口暁彦

作家ステートメント

スマートフォンのようなポケットに収まる小型のデバイスが普及し、日常の中で常にインターネットに繋がり、コミュニケーションの多くがそこで行われている現在。まさに、メディアテクノロジーは日々の生活と地続きなものになっている。それは、コンピュータやネットワークの中の出来事が画面の中だけで完結するのではなく、画面の外の生活と接続しているような状態でもある。iPad や iPhone といった、日常の中に浸透したデバイスを最小限の操作で構成した彫刻作品『思い過ごすものたち』は、それらを静かに可視化し鑑賞者に問いかける。

(谷口暁彦)

谷口暁彦 (たにくちあきひこ) :

1983 年生まれ。インスタレーション、パフォーマンス、ネットアート、彫刻、映像作品などを制作する。主な展覧会に「[インターネット アート これから]—ポスト・インターネットのリアリティ」(2012 年 NTT インターコミュニケーション・センター)、「思い過ごすものたち」(2013 年 飯田橋文明)、「マテリアライジング展 / 情報と物質とそのあいだ」(2013 年 東京藝術大学陳列館) など。<http://okikata.org>

『コールズ』 毛利悠子

メディアインスタレーション (2013)

本作は、人間が感じるできない力=磁力を動力にして、世界各国の「なにかを呼ぶ」オブジェクトを鳴らし、音が響いていくインスタレーション。これまでに、韓国の神前の鈴、ラオスの動物を呼ぶ鈴、台北のフォークとワイングラスなどを使用し、インスタレーションを構成している。方位磁石のまわりに磁界を発生させ、針がゆらぐことで動作スイッチを可動させる仕組みにより、音は不規則に空間に響き渡る。



©Yuko MOHRI

作家ステートメント

ここ数年、展示する場所にそもそも存在する諸現象(光、重力、雑音など)と、小さなオブジェクトを組み合わせるインスタレーションを発表してきた。空間の些細な現象をオブジェクト使うことで強調し、注意をそちら向かせることで、その場所が違ってみえてくるようにする。それは、場所や建物がすでに備えているが、簡単には見えてこない、重ねてきた歴史や、建物の構造から生まれる特別な現象を、作品を通して呼び覚ますことにも思える。

『コールズ』は、古くから人や、人ならぬものまでも「呼び覚まして」きた道具を使い、「アートハックデイ」「トランスメディアアール 2014」の舞台となる場所の何かを呼び覚まそうとするものである。

(毛利悠子)

毛利悠子 (もうりゆうこ) :

1980 年神奈川県生まれ。作品中の素材のひとつが生き物のような動きをするのが大きな特徴で、組み合わせられた楽器や道具が、音を出したり光を放ったりすることによって、独特の空間を作り上げる。近年の展覧会に、個展『おるち』(2013, waitingroom, 東京)、グループ展『見過ごしてきたもの』(2013, せんだいメディアテーク, 宮城)、グループ展『アノニマス・ライフ』(2012, NTT インターコミュニケーション・センター, 東京)、個展『サーカス』(2012, 東京都現代美術館, 東京)、グループ展『x_sound』(2012, ナム・ジュン・バイク・アートセンター, 韓国) など。<http://mohrizm.net>



■参加作品 (12/20 発表済)

『どうでもいいね!』 IDPW (アイパス)

ソフトウェア (第16回エンターテインメント部門新人賞)

本作は、世界最大の SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) Facebook に付加することができる Google Chrome (ウェブブラウザ) の機能拡張。インターネット上には、超低解像度の情報しかもたない Facebook の「いいね!」ボタンが驚異的な速度で浸透し、席卷している。インターネット上で公開された本作を導入すれば、いいも悪いも義理もとっておきも全部まとめて、「いいね!」可能。画面に表示されている「いいね!」ボタンのだいたい全部を、ワンクリックで自動的にクリックすることができる。 <http://idpw.org/porto/w/000001/>



©IDPW

「トランスメディアレ2014」出展にあたって

国内で話題化した「どうでもいいね! ボタン」は、同じく Facebook の普及するドイツでも似た感覚を共有できるのか。その感覚の正体とは一体何なのか。「どうでもいいね! ボタン」の持つ根本的な感覚を広く捉え直し、トランスメディアレ内で問い直す。出来上がったアプリは新作として発表予定。

IDPW (アイパス) :

「100年前から続く、インターネット上の秘密結社」として「インターネットが降臨する場」をつくる活動を行なう任意団体。現在十数名のメンバーが水面下で活動中。毎月、パーティーを装った集会を行ったり、PORTO というアプリ配布プラットフォームからどうでもいいモノを発信している。 <http://idpw.org/>

『VideoBomber』 (ビデオボマー) エキシニモ/渋谷家/Maltine Records

アプリケーション、メディアパフォーマンス (第17回エンターテインメント部門審査委員会推薦作品)

オリジナル VJ 用アプリ『VideoBomber』は、小型化したプロジェクターを担いで、好きな場所に好きな映像を投影することができる。映像と身体性を組み合わせた新しい VJ スタイルを生み出す。映像はスクリーンの呪縛から逃れ、アイディア次第でどこへでも投影できる。メディア技術の固定化された使われ方を疑い、開放することで映像表現の新しい可能性を探求している。

<http://exonemo.com/iPhone/videobomber/>



©exonemo / 渋谷家 / Maltine Records

作家ステートメント

高度化する CG、高解像度化するディスプレイ、小型化するプロジェクターや映像再生装置 (としてのスマートフォン)。『VideoBomber』はそれら最先端テクノロジーに乗っかりつつも、その期待するところを完全に裏切った、映像表現そのものへのハッキング行為である。機動力、適応力の高さを最大限に活かし、特殊な環境から繰り出される新たな表現や技を模索する。

(エキシニモ)

エキシニモ:

千房けん輔と赤岩やえによるアート・ユニット。インスタレーション、ソフトウェア、デバイス、ライブパフォーマンス、イベント・プロデュースなど、その活躍は多岐に渡る。

<http://www.exonemo.com>



4. 関連イベント

トランスメディアールのメイン会場である世界文化の家 (Haus der Kulturen der Welt=HKW) で、文化庁メディア芸術祭のプレゼンテーション、トーク、イベント等を実施します。

「アーティスト・プレゼンテーション」

「トランスメディアール 2014」のオープニングで行われる成果発表。「アートハックデイ」に参加した作家全員によるプレゼンテーションに本企画出展作家も登壇します。

日時：1月29日(水) 19:00～
会場：世界文化の家 (HKW) 展示ホール

出演：エキソニモ
IDPW
谷口暁彦
毛利悠子
ほか

「アーティストトーク」

第一部「理想郷からの脱出」

ある時期まで、自由を獲得するための理想郷として語られることも多かったインターネット。ビッグブラザーに反旗を翻し、個人に自由をもたらすはずだったネットという場が、気がつけば窮屈な場になってしまった。インターネットが日常そのものになった時代のリアリティをテーマにしてきた、エキソニモとIDPWとともに新しいリアリティを再確認する。

日時：1月31日(金) 16:00～
会場：世界文化の家 (HKW) ホワイエステージ

出演者：伊藤ガビン (企画ディレクター)
エキソニモ
IDPW

第二部「八百万のモノ／ものから勝手にいきものを感じとる」

生命体のようなフォルム、形式からかけ離れた作品であるにも関わらず、どこか「いきもの」の息吹を感じさせる作品を作るふたりの作家。それは人工的な生命でも知性でもなく、ロボットともかけ離れているが、新しい「いきもの」の輪郭を持っている。メディアアートの世界でもかなり特異な立ち位置の彼らが見ている「いきもの」の世界を覗きみる対話を展開する。

日時：2月1日(土) 19:00～
会場：世界文化の家 (HKW) ホワイエステージ

出演者：伊藤ガビン (企画ディレクター)
谷口暁彦
毛利悠子

『インターネットヤミ市』

『インターネットヤミ市』とは、「インターネットに関するものを直接売買する」ことをコンセプトに、出展作家であるIDPWが企画し、これまでに東京で2回にわたって開催されてきたイベントである。クリエイターやアーティスト、プログラマーなどが、インターネットにまつわる品々を持ち寄り、その場で創作活動を繰り広げるフリーマーケットのようなイベントからは、データ流通や販売の新しい在り方までが見えてくる。インターネットをモチーフにした実験的な試みや活動、作品制作を行うIDPWの注目の企画を、今回は「トランスメディアール 2014」のクロージングイベントとして開催する。

日時：2月2日(日) 12:00～20:00
会場：世界文化の家 (HKW) 展示ホール

参加者：トランスメディアール参加アーティスト
ドイツ・ベルリン在住アーティストなど



アップルにリジェクトされた iPhone アプリなど、ゆるやかにネット空間のクリーン化から排除された品物を売買したり、「twitter であなたのことを褒める行為」を安価で対面にて売りさばく。実際に大手代理店などが行っているグレイなマーケティング行為などが個人売買される「違法であるが、インターネット空間から排斥された商業行為」が行われるマーケットである。<http://berlin.yami1.biz/jp/>



『Desktop BAM』 (デスクトップ・バム) エキソニモ

ライブパフォーマンス (2010)

エキソニモが2010年に発表したライブパフォーマンス作品『Desktop BAM』。会場の壁面にはノートPCのデスクトップ画面が投影され、そこには複数のQuickTimeプレーヤーが並ぶ。スクリプトで制御されたマウスカーソルが、画面上の再生ボタンを次々と操作することで、様々なリズムパターンを奏でる本作。縦横無尽に高速に動き続けるカーソルの様相とリズムからは、人間によるコンピュータの操作・制御を超えた新たな身体性が立ち上がる。

日時：2月2日(日) 20:00~20:15 出演：エキソニモ
会場：世界文化の家(HKW) カフェグローバルステージ



©exonemo

マウス・カーソルをスクリプトで制御して、デスクトップ上で演奏するパフォーマンス。その昔、ターンテーブルを通常とは違った使い方をして生み出された「HIPHOP」へのストレートなオマージュでもあり、タイトルの「BAM」の由来は、HIPHOP初期の指導的役割を担った「Afrika Bambaataa」より得られている。

人間には不可能なほど高速で、正確なマウス・カーソルの動きが生み出すダイナミズム。その動きは鑑賞者の身体性を立ち上がらせると同時に、人間によって制限されている「コンピュータ」の身体性を実感させる。

■ ドキュメンテーション

『BCCKS』 (ボックス) 松本弦人

紙と電子の書籍が読める作れる売れるサービス『BCCKS』。

web上で編集した本を、iPad、iPhone、android、PC等複数のフォーマットに自動生成するだけでなく、一般書籍レベルの「紙の本」にもできる。その日に起こったできごとをすぐさま電子書籍として配本、大量の写真データなどを1冊から「紙の本」にすることができる。

本企画では、作家のプロフィール、作品の背景や制作過程を取材・収集し、作家の活動やフェスティバル期間中の活気やエネルギーを三冊の書籍として記録。作家の活動報告にもなるBCCKSを発行する。完成した書籍は『BCCKS』のオンライン上にて無料で閲覧できる。<http://bccks.jp/>



「トランスメディアール2014」出展にあたって

『BCCKS』のCCO松本弦人氏がその機能を存分に使い、アーティストプロフィールをマメ単にまとめた『Profil』、制作過程を作品ごとに取材したノート『Anmerkung』全体を通した『Buch』の三冊を制作し、電子と紙で会期中に発行する。

【企画・運営】

NHKインターナショナルは、文化庁が主催する文化庁メディア芸術祭の関連事業である「文化庁海外メディア芸術祭等参加事業」の企画運営を受託し、日本のメディア芸術の発展に努めています。

【お問い合わせ】

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業事務局 (一般財団法人NHKインターナショナル内)

TEL: 03-6415-8500 FAX: 03-6415-8502 E-mail: jmaf-info@nhkint.or.jp